

「いじめ対策総合推進研究」 成果報告

いじめ問題の解決に向けて V



平成25年3月
愛媛県教育委員会人権教育課

はじめに

本年度は、全国的にいじめ問題が社会的問題として大きくクローズアップされる年となりました。県教育委員会としましても、文部科学省からの通知を受けて、7月19日付けで「いじめ問題への取組の徹底について」、12月4日付けで「いじめの問題に関する緊急調査を踏まえた取組の徹底について」、そして、1月29日付けで「いじめ問題への的確な対応に向けた警察との連携について」などを通知し、各学校におけるいじめ対策の見直し、強化をお願いしてきたところです。

国においては、法令の整備など様々な動きがある中で、私たち教育関係者としては、今一度原点に立ち返り、子どもたちに命の尊さや人と人との絆の大切さをしっかりと教え、全ての学校において、いじめの早期発見・早期対応・未然防止の効果的な取組を、確実に実践するシステムを構築することが重要であると思います。

愛媛県教育委員会では、いじめ対策を教育重点施策の一つに掲げ、平成19年度から、文部科学省の委託を受けて、地域ぐるみの総合的ないじめ対策についての調査研究を推進してきました。平成24年度からは、「いじめの起こりにくい学校づくり」をテーマとし、県内に研究推進地域を指定し、いじめの早期発見・早期対応、未然防止につながる取組や、学校・家庭・地域・関係諸機関等による連携を活かした取組などについて実践研究を推進しています。

本年度は、新居浜市を研究推進地域に指定し、市内の東中学校と校区内の2小学校（高津・浮島小学校）及び泉川中学校と校区内の泉川小学校を研究推進校として位置付け、課題解決に向けた調査研究に取り組んできました。この取組についてまとめた本報告書を、各市町教育委員会・学校等における、問題解決に向けた今後の取組にお役立ていただければ、幸いと存じます。

最後になりましたが、調査研究に取り組んでいただきました新居浜市教育委員会と各学校の皆様をはじめ、本事業に御協力いただきました関係各位に心から感謝を申し上げます。

平成25年3月

愛媛県教育委員会人権教育課長

目 次

はじめに

I 新居浜市の取組	1
II 研究推進学校群の取組	
【東中学校区】	2
1 研究のテーマ	
2 テーマ設定の理由	
3 研究の内容	
4 研究の実践・実際	
【泉川中学校区】	8
1 研究のテーマ	
2 テーマ設定の理由	
3 研究の実践・実際	
III 研究の成果と今後の課題	
【東中校区】	17
【泉川中校区】	18

I 新居浜市の取組

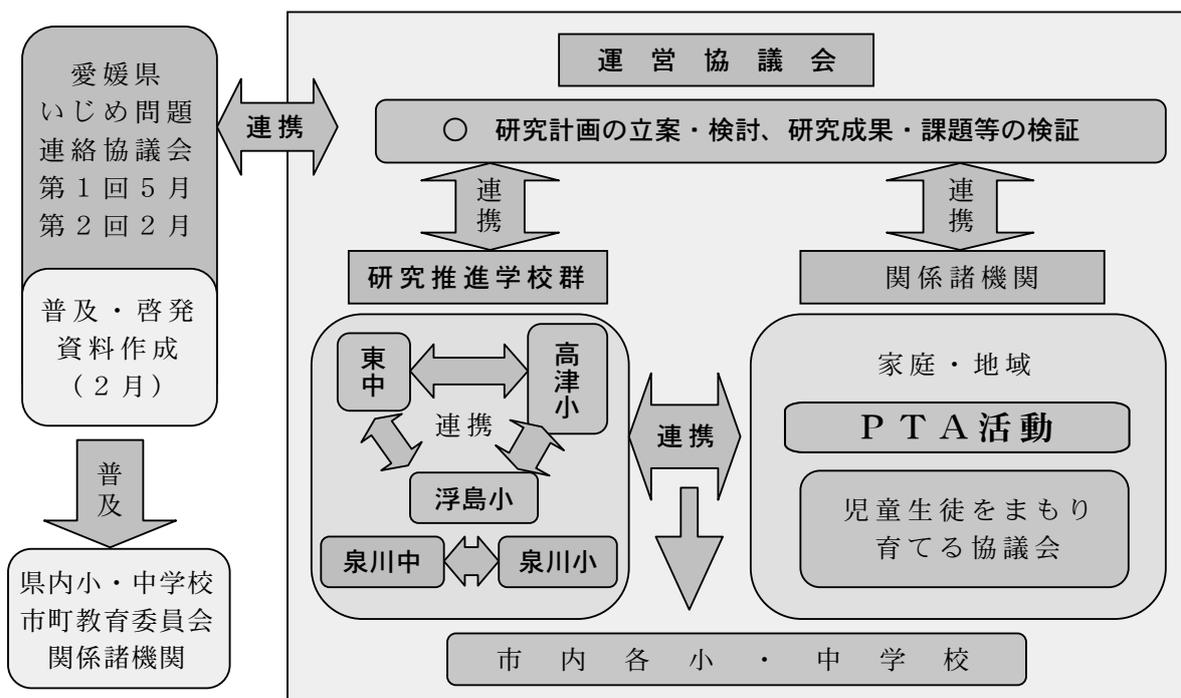
1 研究テーマ

「小中連携によるいじめ・不登校を生まない楽しい学校づくり」

2 研究テーマを設定した背景

新居浜市は、教育委員会が掲げている「学校教育の指針」の中で、「いじめ・不登校を生まない楽しい学校づくり」を最重要課題に掲げ、様々な取組を行ってきた。なかでも小・中学生の相互交流を活発に行うことが、問題行動やいじめの未然防止、早期発見・早期対応につながり、大変効果的であることが実証された。そこで、研究テーマ「小中連携によるいじめ・不登校を生まない楽しい学校づくり」を設定し、今後更にいじめの未然防止、早期発見・早期対応を図っていくこととした。

3 研究推進体制



4 研究内容

(1) 小・中学校の効果的な連携の在り方の実践研究

いじめの未然防止と早期発見・早期解決のため、小・中学校のより効果的な連携の在り方について、東中学校区と泉川中学校区において小・中学校共同実践研究を行う。小・中学校教職員の活動交流、情報交換や小・中学生合同活動の実践研究を推進する。

(2) アンケートや心理検査（Q-U）の効果的な活用方法の実践研究

携帯電話やインターネットを使ってのいじめの発生が危惧され、認知されにくくなっている現状を考えると、教職員の観察と子どもの実態のズレ

を補う手立てが必要と考える。そこで、定期的を実施する調査アンケートの様式や実施方法の工夫改善と心理検査（Q-U）の効果的な活用方法について実践研究を推進する。

(3) 家庭や地域との効果的な連携の在り方の実践研究

各中学校区の「児童生徒をまもり育てる協議会」の見直し、改善を図り、活性化を促すことによって、いじめや問題行動に対して、学校のみならず家庭、地域が一丸となって取り組むことができる組織づくりについて実践研究を推進する。

II 研究推進学校群の取組

【東中学校区】

1 研究のテーマ

いじめを生まない土壌づくりの総合的研究
～絆づくりの場となる学校を目指して～

2 テーマ設定の理由

いじめは子どもの生命に関わる重大な問題であり、いかに早期に認知し、解決を図るかということが大きな課題となる。しかし、それ以上に大切なのは、いじめを生まない土壌づくりである。学校全体に規律があり、一人一人の個性が尊重され、居場所があり、全体に守られているという土壌があれば、いじめの発生を未然に防ぐことができると考え、このテーマを設定した。

3 研究の内容

- (1) 学校生活を規律と潤いのあるものにするための取組
- (2) 小中連携の取組
- (3) 学級集団アセスメント(Q-U)を活用した取組
- (4) 東中校区「児童生徒をまもり育てる協議会」の見直し

4 研究の実践・実際

- (1) 学校生活を規律と潤いのあるものにするための取組

【東中学校】

ア 校内環境の整備（割れ窓理論の実践）

(7) 清掃活動の徹底

一日10分間の清掃を、清掃三原則 ○黙働（だまって）○皆働（みんなで）○精働（時間いっぱい）を徹底させることで、充実したものにした。

(1) 校内掲示の工夫

- a 心にしみる言葉の掲示
- b 踊り場への一輪挿し
- c 階段や廊下の立体的掲示
- d 廊下中央への花の設置
- e 立ち入り禁止部分への花の設置



立体的掲示

イ 生徒主体の授業実践

全ての生徒が意見や考えを発言できる機会や雰囲気がある授業を目指し、主に小集団活動を推進している。

【高津小学校】

ア 学校長のリーダーシップによる「四つの約束」の実施

「四つの約束」とは、「挨拶」「返事」「けじめのある行動」「思いやりの花」の四つである。「四つの約束」を学校生活全てにおいて浸透させるために、各学年・学級・児童会が具体的な取組をした。教師の押しつけでなく、「約束を守ろう」という児童自らの意欲が高まるよう、児童が中心になって行う活動の支援を粘り強く行っている。



四つの約束

イ 「高津小学校内外の生活について」による意識統一

校内で指導する生活指導に関する様々な事例を拾い出し、それらに対する学校の指導方針と保護者に対する説明を明文化した。これを全教職員に配布し、指導の徹底と統一を図っている。

ウ 道徳教育全体計画の見直し

道徳教育の全体計画を見直し、規範意識と思いやりの心を高めることに重点をおいた計画を作成した。



仲良し遊び

エ 仲良し遊びの実践

月1回、全校を1年から6年までの男女混合10人程度の75班に分け、グループごとに遊ぶ「仲良し遊び」を行っている。

【浮島小学校】

ア 学校のきまりの周知徹底

入学時だけでなく機会を捉え、「学校のきまり」を配布し、内容を保護者に周知する。

イ 自由服等についての意識統一

代表委員会での話し合いを行い、「守らされている」から「自ら守る」へ意識を変えていく。

ウ 校内生活の反省

毎月の目標（児童会で決定）の振り返りと「反省カード」への記入を行う。

エ 地域との連携

(ア) 「児童生徒をまもり育てる協議会」との連携

(イ) 川東児童センターとの連携

(ウ) 「まもるくんパトロール隊」との連携



まもるくんパトロール隊

オ 教師・児童間の交流

(7) 通常の学級担任等が特別支援学級の授業を行う担任交流

(1) 異学年との交流

(2) 小・中連携の取組

ア 東中校区小・中連携の具体的取組

(7) 昨年までの取組の改善

a 本年度は、小・中引き継ぎ会と小・中連絡会（3、5月）の情報交換の時間を増やし、きめ細かい話合いをもった。

b 東中校区あいさつデイ（月1回）

本年度からは、民生委員の方が、運動に参加し、児童生徒、地域一体となった活動ができた。広報活動も強化し、PTAへの啓発文書、学校ホームページ、学校便りでの紹介を行った。

c 高津校区三世代交流運動会（5月）

毎年高津小学校出身の中学1年生50名程度が手伝っている。幼稚園児や小学生を指導したり、誘導したりする姿がとても好評だった。

d 校区「児童生徒をまもり育てる協議会」の見直し（後述）

e 授業交流（英語科、特別支援学級）

東中英語教員2名が浮島小6年生の英語の授業を参観し授業研究に参加した。また、中学校特別支援学級担任が高津小、浮島小の特別支援学級の授業を参観し授業研究に参加した。事後、参観の様子を職員会で報告し、中学校全教職員がその成果を共有した。

f 出前授業（理科、体育）

理科では、11月に、東中理科教員（授業のエキスパート認定）が高津小6年生を対象に出前授業を行った。題材は「電池」。導入の段階から、児童の反応がよく、感嘆の声が多く上がっていた。代表児童が実験に参加するときには、興味津々な様子で、熱心に取り組んでいた。

体育では、中学校サッカー部顧問によるサッカー教室を開催した。サッカーの



小・中連絡会



東中校区あいさつデイ



授業交流（英語）



出前授業（理科）

技術指導に加え、中学校生活の心構えや残りの小学校生活の過ごし方などの説明を行った。

(1) 小・中、小・小教職員自由交流

今年度の新しい取組として、自由参観週間（1月15日～1月18日）を決めて小・中、小・小教職員が自由に互いの学校を参観できるようにした。



出前授業（体育）

(3) 学級集団アセスメント(Q-U)を活用した取組

ア 取組の流れ

(7) 第1回学級集団アセスメント(Q-U)の実施（6月）

(1) 第1回診断結果が出る（7月）

(ウ) 職員研修会（8月）

Q-U検査の効果的活用法。学年での意見交換。

(1) Q-U活用シートの作成（夏休み）

(オ) Q-U活用シートの再検討（9月）

(カ) 各校で改善に向けた具体的な実践

(キ) 第2回学級集団アセスメント(Q-U)実施（11月末）

(ク) 第2回診断結果が出る（12月）

(ケ) Q-U活用シートの完成

3学期以降の具体策を考察し実践していく。

イ 東中校区第1回Q-U検査（6月実施）結果の概要

4タイプ（Ⅰ 学級生活満足群 Ⅱ 非承認群 Ⅲ 侵害行為認知群 Ⅳ 学級生活不満足群）それぞれに属する児童・生徒の割合を学校別に出し、それをまとめ東中校区全体としての状況を把握した。これらの結果を学校間や全国平均と比較し、東中校区のおおまかな現状認識とした。以下がその結果をグラフ化したものである。

	□Ⅰ群	□Ⅱ群	□Ⅲ群	□Ⅳ群	数字は%
東中	61.4		15.4	11.6	11.6
高津小	53.9		18.3	12.3	15.6
浮島小	66.7		11.1	9	13.2
東中校区全体	57.3		16.8	11.8	14.1
全国平均	35	15	17	33	

ウ 改善に向けた具体的取組

(7) 支援が必要な児童生徒への対応例

日頃の観察やQ-U検査結果から判明した支援が必要な児童生徒に対しては各校で学級担任が中心となり、個別に様々な取組をした。

a 中学校例

番号	生徒	問題点・理由	指導の手立て
①	男 A	非承認。学習の定着と行動が遅いので、級友からの言葉かけがきつい。	学級での委員・係活動の場面や体育大会の練習等を通じて、多くの場面で積極的に声かけを行っていく。Aに対する厳しい言葉かけはその場で随時指導を繰り返していくと共に、本人に先を見通した行動を心がけるように指導する。リーダーにも予め穏やかに声をかけて素早い行動を促す様に依頼する。
②	男 B	非承認。表情が少ない。級友にも教師にも一線を画す。	Bには積極的に話しかけると同時に、活躍する場面を設け、その活動に対して認める声かけを全体の場で行う。
③	男 C	侵害行為認知群。不登校傾向。難聴により侵害されていると感じているが、教員はその現場等を確認できていない。	傷害行為が実際にあるのか、どの程度なのかを経過観察を行い確認をする。Cには、登校にも影響してきているので、個別面談により「気になること」はないか聞き取り等を行う。その後、対策を練る。
④	女 D	侵害行為認知群。委員会活動で指示等を出す立場にあり、他の女子が協力的でない場合があると想像できるが、確証はない。	女子生徒のDは、2学期からは委員が変わるので、様子を見ていく。孤立したり、表情が常に暗いようであれば個人面談を行う。

b 小学校例

ポット番号	児童	問題点	指導の手立て
①	男子	要支援群、リーダーのようだが、友達にちょっかいをかけたたり、暴力的になったりする。	声掛けや日記指導により褒める回数を増やす。よく手伝いをするので、頼りにしていることを伝え、自信を持たせる。
②	女子	不満足群、しっかりしているが、友達に阻害されたことでの相談を受ける。	声掛けや日記指導により、友達とのトラブルがないか、いつも聞くようにし、いつでも相談できるという安心感を持たせ、友達と進んでかかわることに抵抗をなくしていく。
③	男子	不満足群、やや自己中心的に感じられ、友達の欠点が気になり指摘する。	よく話しかけてくるので、よく話を聞き、気持ちを安定させる。友達の良いところを認める接し方を伝えていく。
④	男子	不満足群、発達障害の疑い。こだわりが強く、非承認感、自己否定感が高い。	常に観察し、コミュニケーションの仕方を指導する。感情が高ぶってきたら、じっくりと落ち着いて話を聞き、納得させる。その際、必ず、自分はみんなに認められていること、やれば必ずできることを、本人がどのように言おうと告げていく。
⑤	女子	非承認群、忘れ物が多く、友達とのコミュニケーションをとらない。	褒めること、学習に自信を持たせることで、自己肯定感を増加させ、友達と少しずつ話ができるようにする。

(イ) 学年・学級づくりの取組

a 中学校例

- キラリと輝く人になるプロジェクト
帰りの会で、自分の一日を簡単に振り返る時間を設定した。振り返りカードを記入させ、学級で共有すべきことは、全体に報告し、賞賛し合えるようにした。



振り返りカード

b 小学校例

- グループエンカウンターの実施
- 朝の会のスピーチ
- 達成感を味わわせる活動の充実
様々な行事や集会の時には一人一役を心掛け、司会や代表の挨拶なども全ての児童が行うことができるように配慮した。
- 賞賛の場の設定
帰りの会では、児童相互の賞賛の場を設けるとともに、小さなことでも



グループエンカウンターの様子

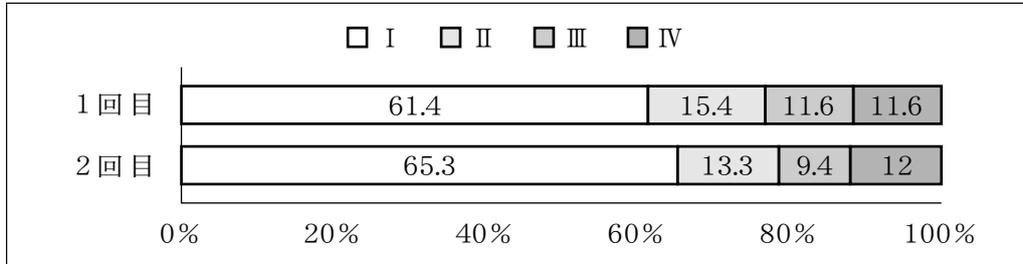
その場でほめるなど、教師からの賞賛を増やしていった。

c 保護者との連携

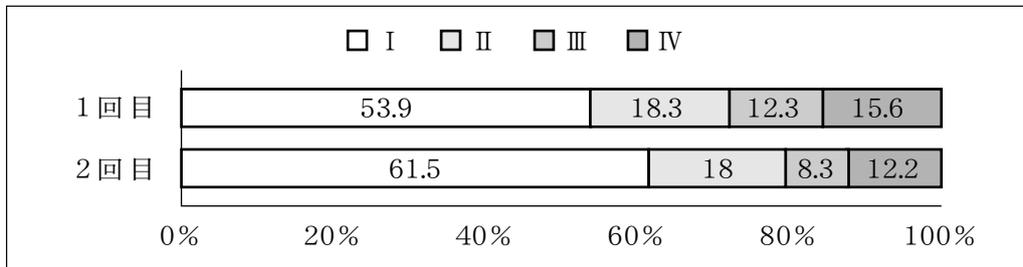
学期末個別懇談会では、Q-U検査の個別票を保護者との話合いの資料にし、児童生徒の課題を家庭と共有できるようにした。

エ 東中校区第2回Q-U検査（11月末実施）結果の概要

○ 東中学校



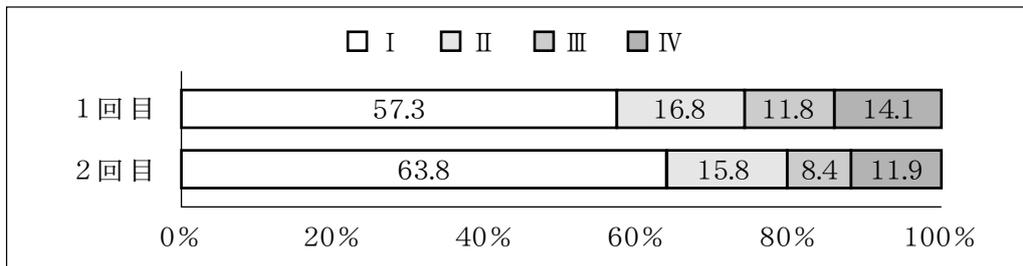
○ 高津小学校



○ 浮島小学校



○ 東中校区全体



(4) 東中校区「児童・生徒をまもり育てる協議会」の見直し

ア 活性化のための具体策

(ア) 会合を年1回から年2回に

昨年度までは年1回（7月開催）であった。これだけでは、その後協議内容をどのように生かし実践したかという見極めができない。また、児童・生徒の問題



第1回協議会の様子

行動が増加してくるのが、2学期以降になるという実態も踏まえて、12月に2回目の会合をもつようにした。

(イ) 見守り隊代表者の参加

本年度は昨年度までの協議会員に加えて、地域の見守り隊の代表者にも参加していただいた。

(ウ) 東中校区健全育成の会

3年前、東中は生徒指導上の多くの諸問題を抱えていた。その時、教師だけの指導では限界があったため、地域の教育力に協力を要請する目的で、本協議会を母体として、東中健全育成の会を立ち上げた。月1回の会合を今も継続している。



東中校区健全育成の会（5月）

【泉川中学校区】

1 研究のテーマ

- (1) いじめの未然防止、早期発見・早期解決につながる、小・中学校教職員の活動交流、情報交換や小・中学生合同活動などによる小・中連携
- (2) いじめの未然防止、早期発見・早期解決のため、アンケートや学校満足度調査等を活用した児童・生徒の実態把握とそれを活用した集団・個別指導による学級づくりや学校づくり
- (3) 校区にある「児童生徒をまもり育てる協議会」や「泉川校区定例会」のネットワークを活用した、いじめの未然防止と早期発見・早期解決への取組

2 テーマ設定の理由

困難な状況にある児童生徒が多く、落ち着いて安定した学校生活が送れず、感情をコントロールできずに、友達とのトラブルに発展することが多い。そのため、軽はずみな言動からいじめにつながることもある。

そこで、小・中学生の相互交流を活発に行うことで、児童生徒が共に社会に貢献する活動を行い、体験を共有する機会を意図的かつ計画的につくることによって、社会の一員としての自覚を高めるとともに人権感覚を醸成し、いじめの未然防止、早期発見・早期解決につなげていきたい。

また、教師の見えないところでいじめが起こることが多く、携帯電話やインターネットを利用したいじめも発生していることから、迅速かつ的確に認知し、早期解決を図るために、児童生徒の実態把握とそれに基づく適切な指導を行うことが必要である。そのため、いじめ調査やアンケートの方法を検討し、学級満足度尺度アンケート等の活用を図りたい。

さらに、いじめの未然防止、早期発見・早期解決には家庭、地域との連携は不可欠である。そこで、年に2回行われる「児童生徒をまもり育てる協議会」と毎月行われる「泉川定例会」のネットワークをいかに強化し、活用していくかということの実践研究を行いたい。

3 研究の実践・実際

(1) 小・中学校の具体的な連携の在り方の研究

ア 教職員の相互連携

(ア) 担当者連絡会

これまでに2回担当者連絡会を実施している。教頭、教務主任、生徒指導主事、各事業担当者などが集まり、これからの行事の日程や内容について協議し情報交換を行った。また、小・中学校が連携して行う行事の前にはそれぞれの担当者が集まり、打合せは何度も行っている。このように、小・中学校の間で何度も話し合いをすることにより、きめの細かい情報交換ができ、児童生徒理解につながったと思われる。

(イ) 出前授業

今年度は中学校の教員が、外国語活動の出前授業を行った。事前に小学校の6年生の学級担任と打合せを行い、題材や授業の進め方について協議をした。それを基に中学校の英語科の教員で指導案を作成し、授業を行った。泉川中学校では英語科の教員4名で、3クラス一斉に授業を行い、他の教員全員で授業を参観した。同一の指導案を基に授業を行ったが、各クラス児童の実態が違うので、それぞれ異なった展開になった。

授業後の児童の感想を読むと、とても分かりやすく、中学校の授業の進め方が分かってよかったなど、中学校の授業を楽しみにしている児童が多いことが分かった。参観した中学校の教員からも児童の様子がよく分かってよかったという意見が多く聞かれた。



出前授業

〈児童の感想〉

- 時間の言い方を覚えるのは楽しかった。文字も覚えてみたい。
- 中学校の英語の授業の進み方がよく分かったし、英語が楽しいことが分かって中学校の授業が楽しみです。

出前授業(外国語活動)児童アンケート結果

	はい	いいえ
1 授業に意欲的に取り組むことができたか。	77人	1人
2 来年度も出前授業を続けたいと思うか。	77人	1人

出前授業(外国語活動)教師アンケート結果

	はい	いいえ	どちらとも いえない
1 子どもたちは楽しく授業に参加していたか。	20人	0人	1人
2 来年度も出前授業を続けたいと思うか。	17人	0人	4人

(ウ) 出前説明会

今年度は、保護者への学校説明会の前に、6年生の児童を対象に、出前説明会を実施した。事前にアンケートを実施して、6年生の聞きたいことをまとめて、それを基に説明することにした。生徒会役員5

名と教員3名が小学校へ出かけて行き、1時間程度の説明を生徒が中心となって行った。配布資料と行事を紹介するプレゼンを用意して、できるだけ6年生に分かりやすいように工夫をして行った。最後に質問の時間を設けて、説明を聞いて分からないところや新たに質問したいことがあれば聞けるようにした。事後に行ったアンケートを読むと、「知りたかったことがよく分かった。来年も続けてほしい。」という意見が多かった。



出前説明会

〈児童の感想〉

- 中学生になる前に中学のことを前もって知ることができて、早めに準備ができるのでよかったです。
- 学校のきまりについて不安だったけど、どんなきまりか分かって安心できました。

出前説明会アンケート結果

	はい	いいえ	どちらとも いえない
説明会の内容がよくわかったか。	75人	1人	7人
来年度も実施したらよいか。	77人	0人	6人

イ 児童・生徒の交流活動

(7) 安全・安心まち歩き

平成22年度からの取組である。小学校通学班を基本に、中学1年生がリーダーとなり、保護者や泉川まちづくり協議会の安全・安心部会、地域見守り隊などの地域の方々のサポートを受けながら、通学路の危険箇所のチェックや環境美化がなされている箇所を自分たちで見つたり、再確認を行ったりしている。昨年まで小学生だった中学1年生がリーダーシップを発揮し、進学に伴って途切れがちな小・中学生の繋がりができている。保護者や地域の方々も100人を超えての協力があり、関心は非常に高い。また、今年度は、芋炊きを振舞っていただき、グループの小・中学生と一緒に食べながら和やかな時間を過ごすことができた。



安全・安心まち歩き

(児童生徒の感想)

今年で、まち歩きに参加するのは3回目になりました。でも、去年と違うのは、私が小学生の先輩になったことです。小学生のみんなと危ない所や素敵な所を見つけて、地域をよりよくすることが少しでもできてよかったです。それと、小学生の人たちと交流できたことがよかったですと思います。今日は、地域の人とも交流できてよかったです。

(中学1年男子)

3回目の「まち歩き」では危なかった所が改善されており、きれいになっていました。逆に改善されないまま、さらにひどくなっている場所もありました。3回目の「まち歩き」でしたが、普段よく見てないことが分かりました。よく見てみるときれいな所、危険な所がよく分かりました。
(中学1年女子)

中学生がいっしょに回りながら、「ここは1回目のまち歩きの際にぼくらが危険を見付けて、今はきれいに改善されたんだよ」と言うのを聞いて、今日の「まち歩き」の意義を改めて感じました。
(6年男子)

中学生といっしょに「まち歩き」をして、中学生が歩くポイントなどを教えてくれてとてもよかったです。みんなで食べたいもたきもとてもおいしかったです。(4年女子)

(イ) 合唱コンクールへの参加

12月6日に文化発表会を行い、その中で合唱コンクールを実施した。6年生の児童と学級担任を招待して、全クラスの合唱を聞いてもらった。中学校の行事に興味・関心をもってもらうと同時に合唱のすばらしさにも気付いてもらうことができた。



校内合唱コンクール

(ウ) アイロード奉仕作業

今年度は3月12日に実施する予定である。これは、中学校2年生と小学校6年生が合同で、校区にある国道11号バイパスのアイロードの美化作業を行うものである。来年度中学校に入学してくる小学校6年生にとって、中学校の最上級生になる現2年生と美化作業を通じて触れ合うことは、中1ギャップの解消や社会の一員としての自覚を高める社会貢献活動になると思われる。

(I) 小・中合同お祭り集会 (小学校)

今年度は、中学生が地域の方と一緒に太鼓台を小学校まで曳き、小学校で合同のお祭り集会を行った。小学校集会委員会と中学校生徒会とで役割分担を明確にしながら、進行を行い、中学生のしっかりした司会の態度、一生懸命の小学生の純真さに互いに共感する態度が見られた。集会の最後には、中学生の力強い太鼓台の差し上げがあり小学生からも歓声が沸いた。小学生と中学生が楽しみながら互いの姿を認める交流活動であった。



お祭り集会



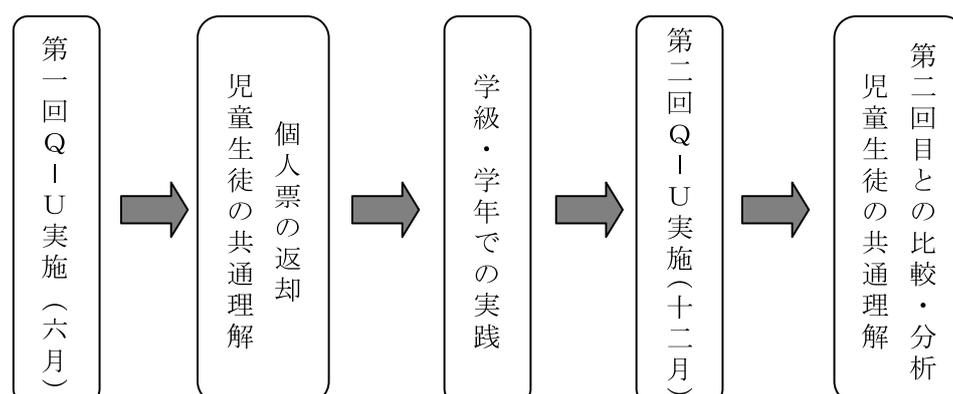
お祭り集会アンケート結果

		小学 4年生	小学 5年生	小学 6年生	中学 1年生	中学 2年生	中学 3年生	教職員
お祭り集会は楽しかったか。	はい(人)	84	71	78	79	79	78	32
	いいえ(人)	1	1	6	6	6	6	0
来年度も合同がいいか。	賛成(人)	82	63	71	68	63	53	26
	反対(人)	3	9	13	5	22	31	6

(2) アンケートや心理検査（Q-U）の効果的な活用方法の実践研究

ア Q-U検査を活用した実態把握と対応

小・中学校の全学年を対象に、Q-U検査を2回実施した。第1回は6月、第2回は12月に実施した。第1回目検査のコンピュータ診断による個人票が7月上旬に送られてきた。個人票は1学期の期末懇談会で担任から説明をして保護者に手渡した。第2回目はコンピュータ診断がないので、学級担任が集計をして、第1回目の結果と比較・分析を行った。



イ 教職員研修

Q-U検査の実施・活用をするにあたり、小中合同の教職員研修会4回実施した。

(7) 第1回 8月17日（金） 9：30～12：00

「Q-Uの活用と学級経営」

講師：新居浜市立浮島小学校長 西原勝則先生

新居浜市教育委員会が主催し、西原校長先生を講師にQ-Uによって何がわかるのか。どのような構成になっているのか。実施後の学級集団の把握とその対応について詳しく教えていただいた。

(1) 第2回 8月28日（火） 13：30～15：30

「いじめ生起のメカニズムとその対応について」

講師：愛媛大学教育学部教授 太田佳光先生

新居浜市教育委員会が主催し、愛媛大学の太田先生を講師に、いじめの定義、類型、その対応について理論を基に講義していただいた。

(ウ) 第3回10月10日(水) 15:30~17:00

「Q-Uの活用と学級経営」

講師：奈良教育大学准教授 粕谷貴志先生

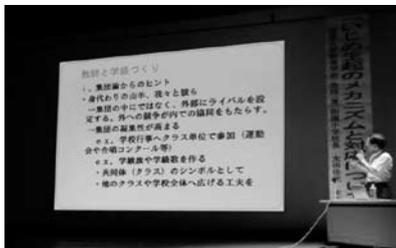
新居浜市教育委員会が主催し、奈良教育大学の粕谷先生を講師に、Q-Uを活用した学級集団の把握と対応策について1回目の研修からさらに具体的な取組について教えていただいた。

(I) 第4回12月10日(月) 15:30~17:00

「Q-Uの活用と学級経営」

講師：新居浜市立浮島小学校長 西原勝則先生

第1回目に引き続き、西原校長先生を講師に、2回目のQ-U検査を実施しての分析・活用についてアドバイスを受けた。具体的な学級集団を例にあげて、その対応について講義をしていただいた。



第2回研修会



第3回研修会

Q-U検査に関する研修会

番号	項目	はい	いいえ	
1	Q-U検査がどのようなものか理解できましたか。	32	0	
2	Q-U検査の分析・活用について理解できましたか。	32	0	
3	研修会の内容は今後の指導に役に立つと思いますか。	第1回	32	0
		第2回	35	0
		第3回	30	0
4	Q-U検査はいじめの早期発見・早期対応に役に立つと思いますか。	35	0	

ウ Q-U検査を活用した取組

(ア) Q-U活用シートの作成

小学校ではQ-Uの結果を元に各学級で活用シートを作成し、個別の指導・支援の必要な児童の活動計画を立て、学年、全校で共通意識をもって指導に当たれるようにした。

1 学級の実態および問題と感じていること

2 個別の指導・支援が必要な児童の問題と考えられる点と対応

	要支援児童	問題と考えられる点	対応
①			
②			
③			
④			

Q-U活用シート 年組 児童数()女子()男子()
学級満足度 分布状況

カテゴリー	人数(6月実施)	人数(11月実施)
I 満足群	()人()%	()人()%
II 非承認群	()人()%	()人()%
III 侵害行為認知群	()人()%	()人()%
IV 不満足群	()人()%	()人()%

3 今後の具体的な取組の手立て(学級、学年等)

4 取組についての評価と今後の課題

個別の指導・支援が必要な児童の問題と考えられる点と対応

要支援児童	問題と考えられる点	対 応
児童A	自己顕示欲が強い 相手を受け入れにくい	本人の言い分を良く聞き、自分の行動を振り返る場を設定する。
児童B	学習に遅れがみられる	石山タイム等を利用して、他の先生にも協力を仰ぎ、個別学習を進めていく。
児童C	友だちとのかかわりがぎこちない	認められる場を多く作る。かかわりのトレーニングをする。

(イ) 具体的な取組

(小学校)

- 学級のルールを守ることを大切にして、ルールの確認や活動後の評価をすることで学級集団を大きくまとめていく。
- 学級生活不満足群の中の要支援群児童については、学年、学校全体で目を配り、教師との関わりも大切にしていく。
- ペア、グループ学習を取り入れ、コミュニケーション能力を育む。
- 学年で、集会を開いて役割をもたせたり、ソーシャルスキルの授業を取り入れたりする。

(中学校)

○ 教育相談の実施

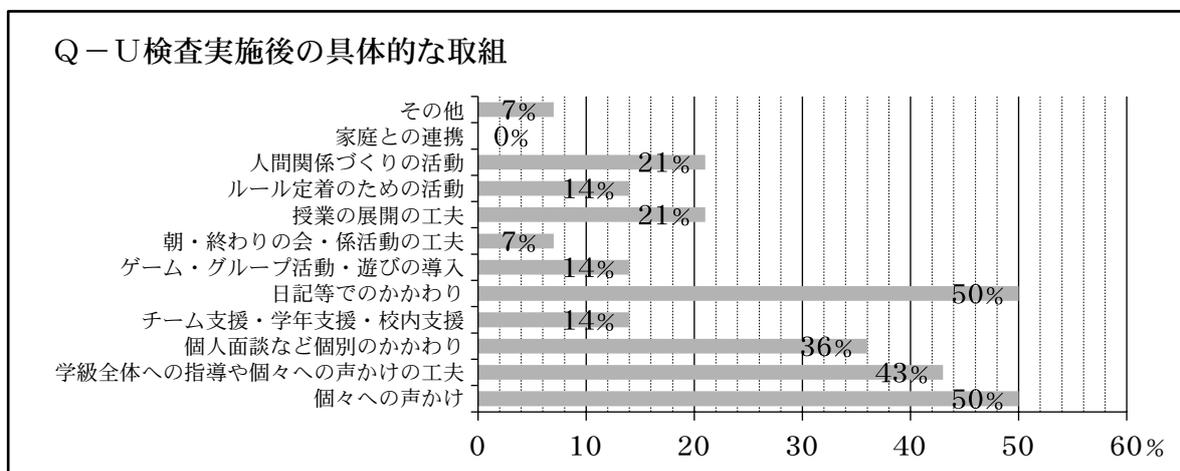
1 回目の Q-U 検査の結果を受けて、必要に応じて教育相談を行った。また、保護者にも 1 学期の期末懇談会で検査結果について説明を行い、今後の生活について話し合いをした。

○ 「ありがとう」を三つ書こう

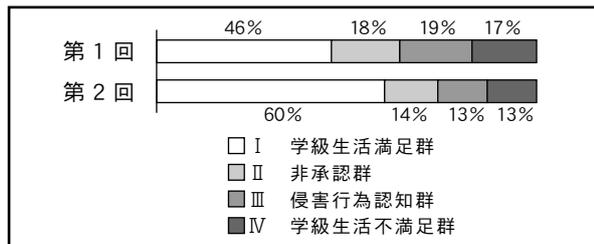
他者への感謝の気持ちをもたせるために、2 週間毎日 3 人の人へ感謝の気持ちをこめてメッセージを書かせた。そしてそれを相手に手渡し、コミュニケーションをとる機会とした。

○ グループエンカウンターの実施

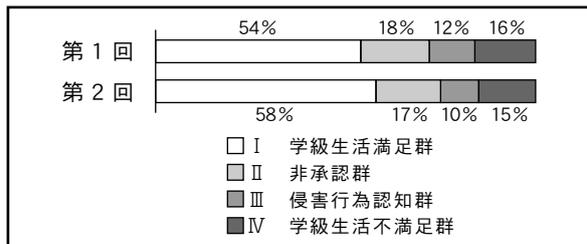
いくつかの学級では、学活の時間を使って人間関係をつくり、お互いを認め合い、励まし合うなどクラスの連帯感を高めるためにゲーム等を用いてグループエンカウンターを実施した。



小学校の結果



中学校の結果



エ 小学校のいじめ調査の工夫、活用方法

これまで、なかよしアンケートとして、毎月、学校で児童にいじめの有無やその内容、また、先生に伝えたいこと、知ってほしいことなど悩みや相談事を記入させていたが、9月からは家庭に持ち帰らせて記入し、保護者からのコメントを書いてもらうなどして、保護者にもいじめの兆候が無いかどうか、子どもの悩みなどを一緒に確認してもらうようにした。それによって、わが子はもちろん、それ以外の児童についても気になることなどが情報としてたくさん届けられ、小さなトラブルの間に解決することができた。

オ 中学校のいじめ調査の工夫、活用方法

月に1度の割合でいじめを中心とした生活アンケートを実施してる。悩みを中心とした内容に加え、その時問題となった事象（自転車のいたずらや落書きなど）について無記名でアンケートを実施した。その結果をもとに担任や学年団で個別の教育相談を随時行い、生徒指導上の諸問題の改善や未然防止のために活用している。

(3) 家庭や地域との効果的な連携の在り方の実践研究

ア 泉川中学校区定例会での連携

泉川中学校区には地域の方と小・中学校の先生たちが参加して行う、定例会と呼ばれている情報交換会がある。これは毎月1回開催されており、そこでは学校であったことをできるだけ地域の方にもお話しして、問題点について協議し、ともに子どもたちを見守り育てていこうとする会である。小・中学校教員の代表、公民館長、各種団体代表者、小・中PTA代表など毎回25名ぐらいの方が参加して熱心に協議がされている。ここでも、いじめ問題に対する学校の取組を説明し、気になることがあればすぐに学校へ連絡してもらえようように協力を依頼している。



泉川中学校区定例会

H24年度定例会参加メンバー

1	地域住民（世話役）	9	子ども見守りボランティア会長
2	地域住民（世話役）	10	学校評議員
3	元PTA会長	11	学校評議員
4	泉川公民館長（学校評議員）	12	まちづくり協議会
5	連合自治会長	13	PTA会長
6	県議会議員	14	PTA副会長
7	泉川校区まちづくり実行委員会会長（学校評議員）	15	PTA副会長
8	社会福祉協議会泉川支部長	16	泉川小学校長

イ 家庭との連携

今年度、小・中学校PTAが中心となり、泉川校区の教育目標を達成するために、毎月3日間を選んで生活習慣チェックを家庭で実施している。チェックする項目は「忘れ物をしなかった」「遅刻をしなかった」「身だしなみを整えた」の三つで、これらを3日間家庭でチェックしてもらい、チェック表を期限までに提出してもらおう。そして、学年ごとに集計をして、次の月の調査依頼のときに結果や分析をお知らせするようにしている。この生活習慣チェックは、親子の対話促進や子どもの様子に注意して見てもらうことなどもねらいとしている。

ウ 地域との連携

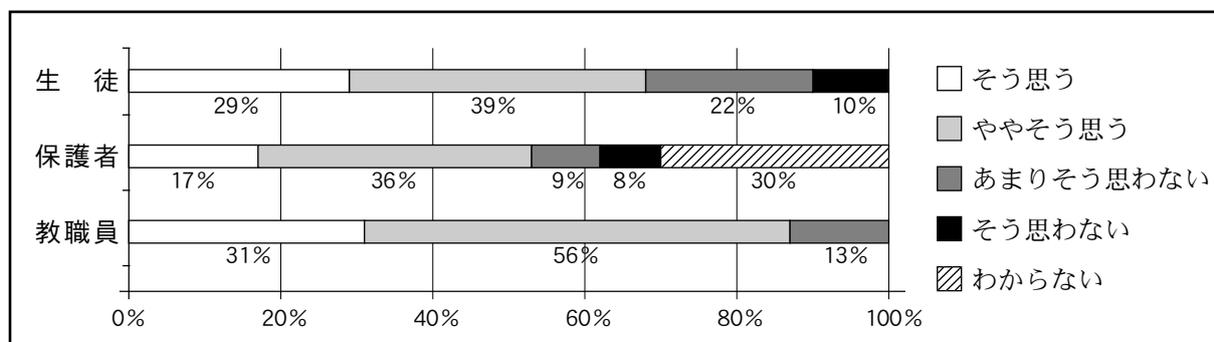
これまでも、家庭や地域との連携は図られていたが、小学校では定期の授業参観や親子行事に今年度は新たに、石山タイム(朝の活動)の毎週金曜日に、地域の方の読み聞かせ活動を行ってもらっている。20分間ではあるが、児童も読み聞かせを楽しみにしており、読み聞かせのおじさん、おばさんとして顔なじみとなり、地域で会うと挨拶をしたり声を掛けたりする姿が見られる。

また、地域の方も、改まった姿ではない、普段の学校での子どもの様子を見ることにより、学校の現状をありのままに理解協力してくださるなど、より緊密な関係ができて



読み聞かせ

エ 学校評価「学校はいじめや不登校の未然防止・早期発見・早期解決に努めていますか」のアンケート結果



Ⅲ 研究の成果と今後の課題

【東中校区】

1 成果

(1) いじめを生まない土壌づくりの推進

3校ともに規律（ルール）と潤い（リレーション）があり、いじめを生まない土壌づくりが進められた。このことは2回目のQ-U結果で、学校生活満足群に属する児童生徒の割合が、全国平均35%のところ、その倍近い、63.8%であったことから表れている。また、2月1日現在東中校区のいじめ認知件数は、去年の6件を大幅に下回り、3件となっている。過去5年間では平成22年度の2件に次いで少ないことにも表れている。

(2) 義務教育9年間で子どもを育てる意識の高揚

様々な小・中連携強化の取組で、お互いをよく知ることができるようになり、義務教育9年を通して子どもたちを育てるという意識の高まりにつながった。

(3) 地域の教育力の活用の推進

東中校区「児童生徒をまもり育てる協議会」を見直したことで、地域の教育力の活用が更に図られ、学校外でのいじめの早期発見やいじめの解決につながった。

2 課題

(1) 今年度のいじめ事例は、全て被害者の保護者からの訴えで判明したものである。早期に解決できたのは幸いなことだが、毎月のいじめ調査や観察で発見できておらず、周りの児童生徒からの訴えもなかったことは、重く受け止め改善しなければならない。

(2) 小・中連携に関しては、教員相互の交流や中学校教員と児童との交流はある程度成果が上がったが、生徒と児童間の交流の場が少なかった。この点については次年度改善したい。

(3) Q-U検査では、個人に視点をあてると、具体的な実践がプラスの関わりになった児童生徒がいる反面、十分に生かされていない児童生徒もいた。個人の調査結果分析を進め、更に個に応じたより細かな支援を行う必要がある。

(4) 地域との連携は、継続が大切である。より緊密な人間関係を築いていくためにも、いかに粘り強く取組を継続していくことができるかが課題と考える。

【泉川中校区】

1 成果

(1) 小・中学校の連携について

小・中学校が連携して行事を行うことにより、教職員の情報交換が密になり、児童生徒への理解が深まった。また、児童生徒、教職員の交流により、中1ギャップ解消につながってきている。

(2) Q-Uを活用した取組について

4回の研修会を通して、いじめ問題に対する教職員の資質・能力の向上を図ることができた。また、Q-U検査によって、科学的な認識に基づいた学級の実態把握ができ、適切な対応ができるようになった。学級や個人の実態を適切に把握し、問題点を少しずつ改善することができている。

(3) 家庭・地域との連携について

家庭・地域においてもいじめや不登校の未然防止・早期発見に対する意識が高まり、地域からの情報提供も増えている。また、学校の教育活動にも協力してくれる人が増えている。

2 課題

(1) 小・中学校の連携について

小・中学校が連携して行事を行うことはいろいろなメリットがあるが、準備するのに時間がかかり、担当教師に負担がかかっている。効果等を見極め、精選して行っていく必要がある。

(2) アンケートやQ-Uの効果的な活用方法について

ア アンケート調査の内容や実施時期、回数について更に検討を加え、いじめの早期発見につなげていかななくてはならない。

イ 2回のQ-U検査を実施し、それぞれコンピュータ診断がなされ、学級担任が容易に比較・分析ができるようにしなくてはならない。

ウ Q-U検査の学級生活不満足群にいる児童生徒へのより具体的な支援や指導体制の確立を図っていく必要がある。

(3) 家庭・地域との連携について

ア 学校からの情報が特定の家庭や地域の人にしか届いていない。さらに多くの家庭や地域の人に学校の取組を知らせていく方法を考える必要がある。

イ 学校行事等により多くの保護者や地域の人たちに参加してもらえるように工夫する必要がある。

ウ 家庭教育の向上を図るための方策を工夫、改善する必要がある。

平成24年度 文部科学省委託事業成果報告
生徒指導・進路指導総合推進事業
(県事業名) いじめ・不登校等対策総合推進事業

発行 愛媛県教育委員会
発行年月 平成25年3月

